

第2部 百済とわが国との関係

——渡来人、王仁と継体大王——

第1部では高句麗・百済・新羅3国の鼎立と抗争を取り上げましたが、これに対する倭の関係や関与については殆ど触れませんでした。実はこの時代に倭は、半島に対してかなり重要な役割を演じています。特に高句麗の広開土王が南進政策を強化しますと、新羅や百済そして伽耶地域が倭との関係を強めます。特に百済は倭に対して積極的に人や物を送り軍事協力を強めます。しかし倭と半島の関係はこの頃に始まったわけではなく、古く縄文時代からごく自然に始まっていたと考えられるでしょう。

1. 縄文時代から弥生時代へ

(1) 縄文時代



日本列島を地図で見ると、内海（日本海）を挟んで大陸に寄り添うように連なっていることが分かります。そして、北は千島列島からカムチャッカ半島に至り、アリューシャン列島を辿ってアラスカに達します。南は沖縄列島から台湾に至り、フィリピンへと繋がります。この地図を見れば、昔は日本列島が大陸と陸続きであったことも容易に領けます。縄文時代の文化は列島固有のものであった、或いは列島に固有の人類が住んでいたという考え方が誤り

であることが理解できます。

人類の起源は数十万年前まで遡ることができるようですが、第4紀洪積世の初期の頃だそうです。人類の最大の特長は道具を作ることと言われますが、この洪積世の人類が作った道具は単純に石を打ち砕いて作った石器でした。この時代を旧石器時代とかプレ石器時代と呼んでいます。またこの時代には土器がありませんでしたので無土器文化の時代とも言われます。以前にはこの旧石器時代には日本列島には人は住んでいなかったと言われましたが、考古学の進歩によってこの説は覆されました。氷河期であったこの頃は当然大陸と列島はつながっていたのですから、ナウマン象も人類も行き来していたのです。

氷河期が終わって沖積世に入ると、石を研磨して道具を作る新石器時代となり縄文文化が始まります。コード・マークト・ポッターー即ち縄文土器が出現する時代です。この時代は狩猟や漁労が主たる生活手段であった採集経済の時代でした。しかし列島の東と西では人種的にも文化的にも異質でした。東部はアジア大陸の北東部とのつながりがあり、西部は東南アジアや中国大陸南部との関係が深いのです。地図で見られるような地形から見て当然のことです。東部では狩猟が主であるのに対して西部では船を利用した漁労が主であったという違いがあります。船を利用するということは、海に隔てられた半島や島々に出掛けての交流・交易が行われるようにな



縄文土器

って、それらの地に進出移住することにもつながりました。相手の地からも同様に人々が訪れてきます。縄文時代からこうした交流のあったことが確認されています。

縄文時代に既に栽培の文化があったことも分かってきました。栗・橡・榿など堅果樹の栽培が行われており、そのための道具などが発達していて、これは大陸から渡来の稲作などを受け入れる素地となったものと考えられます。

弥生時代の高倉



(2) 弥生時代

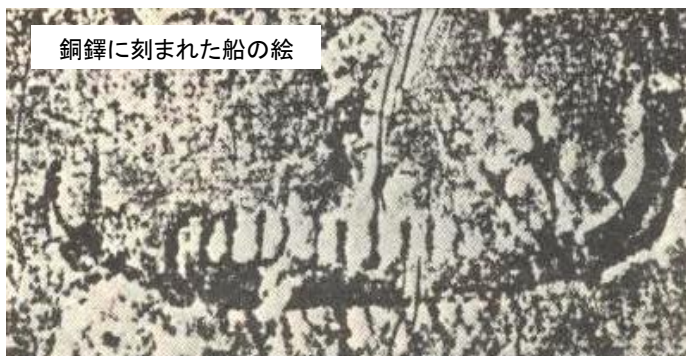
列島西部と半島や中国大陸南部との縄文時代からの交流を背景にして、紀元前3～4世紀頃から弥生文化を担う多くの人々が、主として朝鮮半島から北九州・瀬戸内海地方・近畿に移り住んできました。このとき稲作や養蚕をはじめ、金属器の使用などの多様な文化がもたらされました。気候の変化などにより大集団の移動があったと考えられ、列島の生活様式に大きな変革をもたらしました。

この変革は西から東へと急速に拡大していきますが、列島西部においては弥生文化を大きく受け入れて人々の形質にも明確な影響を及ぼしたのに対して、東北から北海道と九州南部では影響が軽微で縄文人の形質が残されました。東北の蝦夷や南九州の熊襲などはその例でしょう。朝鮮半島南部と北九州や近畿との人種的文化的同一性に比べれば、列島内の西と東との同一性は希薄であると考えられます。

弥生時代は大きく分けて前期（紀元前300～前100年）、中期（前100～100年）、後期（100～300年）とされていますが、後期はまさに耶馬台国が誕生した時期であり、歴史時代へと入っていく頃に当たります。57年に倭奴国王が漢に朝貢して「漢委奴国王」の金印を授けられていますし、107年には倭国王帥升らの使いが漢に朝貢しています。そして189年には卑弥呼が王に立てられますが、247年に死亡しています。卑弥呼の墓ではないかと言われている箸墓古墳は3世紀末に造られたと言われているが、この頃に弥生時代が終わって古墳時代へと移っていきます。

半島ではどのような時代だったかと言いますと、204年に高句麗が都を集安に移して国家体制を強化し、220年に後漢が滅び中国は三国時代を迎えます。そして魏が238年に半島の楽浪・帯方の2郡を復興します。更に魏は244年、245年に高句麗を攻め、高句麗の勢力を遼東・玄菟郡から追放します。247年の卑弥呼が亡くなった年には、帯方郡の太守が張政らを倭国に遣わ

銅鐸に刻まれた船の絵



しています。266年には倭王（台与）が使いを南朝の晋に送っています。4世紀に入って、313年に高句麗が楽浪・帯方の2郡を滅ぼして中国の勢力を半島から駆逐します。

こう見てきますと、半島と倭の間では国家的な交流はまだ未成熟で、民間での自然な交流が繰り返し行われていたのでしょう。半島南部の金官伽耶には倭人が定住していたようで、出土する土器からそのことが推定されています。

2. 渡来人

4世紀になりますとわが国も歴史時代に入り、大王の権力がだんだんと強化されていきますし、半島では高句麗・百濟・新羅の3つの国と伽耶地域が勢力を伸ばして争う三国時代に入ります。

そして国家観念が強くなりますと渡来も政治的な色彩を強めていきます。半島からの渡来の時期は大きく3つに分けて考えることができますが、それは何れも半島において大きな動乱のあった時に当たります。高句麗・百済・新羅が鼎立した三国時代には、抗争の3つの大きな山がありました。①4世紀の終わりから5世紀の初めにかけて、②5世紀末から6世紀初、③6世紀中葉から7世紀の中葉です。そしてそれが、半島から多くの人が列島に渡来してきた背景となったことは疑いありません。

(1) 渡来の第1期

① 4世紀末～5世紀初の流れ

日本書紀の神功皇后46年(366)条に次のような記述があります。

〔斯摩を卓淳国に遣わした。卓淳の王、末錦早岐が斯摩宿禰に言うのに、「百済人久氏がやってきて『百済王は、東の方に日本という貴い国があることを聞いて、われらを遣わしてその国に行かせた。もしよく吾々に道を教えて、通わせて頂けば、わが王は深く君徳とするでしょう』と。そのとき久氏に語って、『以前から東方に貴い国のあることは聞いていた。けれどもまだ交通が開けていないので、その道が分からない。海路は遠く波は陰しい。大船に乗れば何とか通うことができるだろう。途中に中継所があったとしても、かなわぬことである』と。久氏は『もう一度帰って船舶を用意して出直しましょう』と言う。また重ねて『もし貴い国の使いが来ることがあれば、わが国にも知らせて欲しい』と。このように話し合って帰った』と。そこで斯摩宿禰は、従者の爾波移と卓淳国の人過去の二人を、百済国に遣わしてその王を労わせた。百済の肖古王(近肖古王)は大変喜んで厚遇された。〕

そして百済王は367年になって久氏らを遣わして朝貢します。そのとき新羅の貢の使いが一緒に来ました。2つの国の貢ぎ物を調べると、新羅の物には珍しいものが多くあったのに、百済の物は少ない上に良くありませんでした。そこで久氏にどうしたのかと尋ねられると、彼が答えて言うには「私どもは道に迷って新羅に入ってしまった。新羅人は私どもを捕らえて殺そうとしました。私どもは天に向かって呪いました。その呪いを怖れて殺しませんでした。そしてわれわれの貢ぎ物を奪って自分の国の貢ぎ物としました。新羅の賤しいものを以て、わが国の貢ぎ物と入れ替えました。・・・」そこで神功皇后は新羅の使いを責めた上に、千熊長彦を新羅に遣わして百済の献上物をけがしたことを責めたということです。

日本書紀は続けて次のように記しています。「神功49年(369)、荒田別と鹿我別を将軍とした。久氏らと共に兵を整えて卓淳国に至り、まさに新羅を襲おうとした。そのときある人が言うのに、「兵が少なくでは新羅を破ることはできぬ。沙白・蓋廬を送って増兵を請え」と。木羅斤資・沙沙奴跪に命じて、精兵を率いて沙白・蓋廬と一緒に遣わされた。共に卓淳国に集まり、新羅を撃ち破った。そして比自体・南加羅・喙国・安羅・多羅・卓淳・加羅の7ヶ国を平定した。兵を移して西方古奚津に至り、南蛮の耽羅を滅ぼして百済に与えた。百済王の肖古と皇子の貴須は、また兵を率いてやってきた。比利・辟中・布弥支・半古の4つの邑が自然に降伏した。こうして百済王父子と荒田別・木羅斤資らは共に意流村で一緒になり、相見えて喜んだ。」

このようにして倭と百済の関係が始まるのですが、更に同62年(382)には新羅が朝貢しなかったので葛城襲津彦を派遣してこれを討たせ、応神3年(392)には百済王辰斯が天皇に無礼を働いたとして紀角宿禰などを派遣してこれを廃し阿華王を擁立します。新羅や百済が倭の命に従わないときには、有力な家臣を派遣してその反抗を抑えるという行動に出ています。倭と百済の関係が始まってから数十年にして、日本書紀にはかなりの誇張があるとしても、倭は半島南部に大きな勢力を持ったことが推測できます。

この時期は百済においては近肖古王から近仇首王、枕流王、辰斯王、阿華王と続く時代ですが、高句麗との抗争が激しい時であります。また新羅が356年に国家体制を整えて伽耶をめぐって百

済と勢力を競うようになりました。こうして百済は高句麗と新羅に対抗するために伽耶地域の卓淳国を通して倭に接近したのです。新興勢力の新羅も倭を敵に回すのは得策ではなく、友好関係を築こうとします。倭はかねてより交易面で伽耶とはかなり深い関係を持っていましたが、これを機会に半島南部一帯への進出を図ります。そして百済・新羅の立場につけ込んで進出を実現したのでした。

百済の近肖古王は倭と友好関係を結ぶとすぐ369年に馬韓と帯方を併合し、倭王には七支刀を送って同盟関係の強化を図ります。背後を固めた近肖古王は南下政策を取る高句麗に対して進軍し、371年には平壤城を攻略し古国原王を殺害します。領土を大きく広げた百済は都を慰礼城から漢城に移し最盛期を迎えます。この頃には阿直岐の渡来があり、近肖古王は阿直岐の進言を受けた倭王応神の要請に応じて王仁を派遣し、王仁はわが国に論語と千字文を伝えたと言われます。王仁は楽浪郡か帯方郡にいた中国人を先祖に持ち、わが国に渡来する頃には近肖古王が百済に併合した馬韓の地に居住していたのではないかと考えられます。

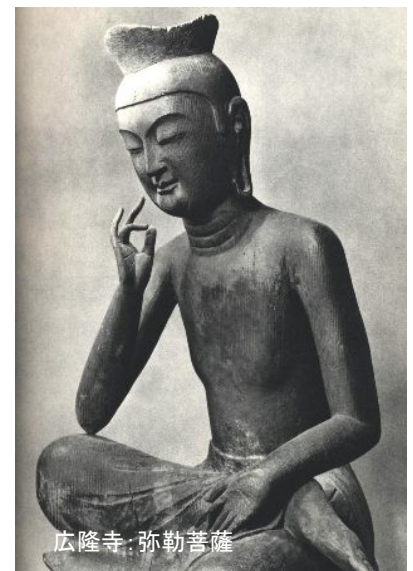
しかし391年に高句麗で広開土王が即位すると、楽浪に進出していた百済や倭の軍隊を攻撃し、396年には百済は高句麗軍に破れて漢江以北の地を失ってしまいます。このような高句麗との抗争の中で辰斯王は倭に対す不満があったのでしょうか、倭王に対して無礼を働いたとして倭の圧力により殺され、阿華王が立てられるという事件が起こります。397年高句麗の圧力を受けた阿華王は南方を固めるために新羅への攻勢を強め、倭に対して弟の直支を人質として送ります。399年に倭はこれに呼応して百済と共に新羅へ進軍します。新羅は高句麗に救援を求め、407年には広開土王が百済・倭連合軍を撃ち破ります。405年に阿華王が亡くなり、倭が直支を立てて王とします。この間の外交交渉の結果として文人や人質の渡来があり、戦乱の結果として多くの百済人や伽耶人がわが国に亡命してくることになります。

以下、著名な渡来者について見てたいと思います。

② 弓月君（秦氏）

応神14年に弓月君が百済からやってきて、「私は、私の国の120県の人民を率いてやってきました。しかし新羅人が邪魔をしているので、みな加羅国に留まっています。」と奏上しました。そこで葛城襲津彦を遣わしたのですが、襲津彦は3年経っても帰って来ません。新羅が邪魔をしているので帰れないのだろうと、今度は平群木菟宿禰・的戸田宿禰に精兵を付けて新羅の国境へと向かわせました。恐れをなした新羅が軟化しましたので、木菟宿禰は襲津彦と弓月の民を伴って帰還しました。日本書紀ではこのようなお話しになっていて弓月君は百済の人のように思われますが、恐らく新羅の勢力の強い加羅（伽耶）地域の人であり、集団で渡来を企てた人たちのリーダー格だったのでしょう。百済の近肖古王が倭に使いを遣わしたのは366年、それ以後倭は積極的に半島へ進出しています。そして397年頃から倭軍が新羅に進入しており、秦氏一族が渡来してきたのは丁度その頃のことと、倭と同盟している百済や加羅と新羅との関係が複雑な中で、伽耶地域から倭へ渡ろうとした秦氏一族の様子が伝わってきます。

「大和は事実上漢人の国、山城は事実上秦の国」という言葉があるように、秦氏一族は今の京都の地を開拓し定住しました。聖徳太子の協力者であった秦河勝が建立したと言われる太秦の広隆寺はその氏寺です。そこにある新羅渡来の弥勒菩薩像はわが国の国宝第1号です。伏見の稲荷大社も秦伊紹具によって創建されています。寝屋川市には秦とか太秦という地名があり、秦氏との関係が考えられます。また播磨や九州豊前にも秦氏に関係の深い神社や戸籍台帳が残されていて、秦氏族



が広範囲に活躍していたことが分かります。

③ 阿直岐と阿知使主

応神15年に百済王は阿直岐（アチキ）を遣わして良馬2頭を献上しました。阿直岐はその馬の飼育も任されたのですが、よく経書を読みましたので、その教養の深さに惚れ込んだ応神は、阿直岐を太子菟道稚郎子の学問の師とされました。応神が阿直岐に「お前よりすぐれた学者がいるか」と問われました。いるわけがないだろうという感じです。しかし阿直岐は「王仁とうすぐれた人がいます。」と答えました。そんな人がいるのならすぐに寄越して欲しいというのが応神の願いでしょう。こうして王仁が遣わされてくるのですが、王仁については次項で述べます。阿直岐は阿直岐史の先祖であると言われます。

百済の阿華王は対新羅戦略として倭と同盟を結ぶため、人質として弟の直支（トキ）を倭に送ってきます。阿直岐は直支と発音が通じるので二人は同一人物ではないかと考えることも出来ます。「経書を読む」ということは儒教の五経に通じているということで、当時としては最高の教養です。そして「王仁がいる」と直ちに返答できる知識は並大抵のものではありませんから、帝王学を学んだ人物と想像できます。このような点から見ても阿直岐＝直支という考え方には説得力があります。なお直支は阿華王のあとを継いで18代直支王（腆支王）となります。

阿直岐と名前は近いのですが別人と思われる阿知使主（アチノオミ）という人が、応神20年にその子の都加使主と17県の自分の輩を率いてやってきて、大和高市郡檜前に住み着きます。この阿知使主は、倭漢直（ヤマトノアヤノアタイ）の先祖であると言われています。倭漢氏は「大和は事実上は漢人の国」と言われた漢人ですが、その中の直系族に倭漢直の姓が与えられました。漢（アヤ）とは古代中国の漢（カン）と同じ字を当てていますので紛らわしいのですが、元は半島にあった伽耶地域の中の安耶（安羅）に由来したものでしょう。秦氏も秦の始皇帝の子孫を名乗ったり、安耶の人も中国漢の末裔だと言ったりして紛らわしいのです。ところで継体大王の時代に百済から漢高安茂という五教博士が来日します。これを見れば漢という名の一族が百済にいたということも考えられます。そうすると倭漢氏は安羅からの人ではなくて、百済系の人ではないかと考えることも出来るのです。

倭漢直氏の中で有名なのは駒でしょう。駒は蘇我馬子の命令で崇峻天皇を殺害しています。崇峻は馬子の妹小姉君の子ですから、馬子は甥を殺害したことになります。駒のように蘇我氏に臣従することによって倭漢氏は繁栄し、多くの氏族に分かれていきました。有名なのが坂上氏で、征夷大將軍となった坂上田村麻呂もその一族です。田村麻呂の父である苅田麻呂が宝亀3年に郡司の選任に関して光仁天皇に言上したことが続日本紀に記されています。ここに出てくる檜前忌寸（ヒノクマノイミキ）とは倭漢直氏が天武天皇から与えられた姓です。「檜前忌寸の一族をもって、大和高市郡の郡司に任命しているそもそもの由来は、彼らの先祖の阿知使主が、輕嶋豊明宮に天下を治められた応神天皇の御世に、朝鮮から十七県の人民を率いて帰化し、天皇の詔があつて、高市郡檜前村の地を賜り居を定めたことによります。およそ高市郡内には檜前忌寸の一族と十七県の人民が全土いたるところに居住しており、他姓の者は十のうち一、二程度しかありません。・・・」光仁天皇はこの言上を受けて、「これより後は、郡司としての系譜を調査せず、檜前忌寸の一門の者を郡司に任命することを許すように。」との勅を出されています。高市郡とはまさに飛鳥の中心地ですが、そこに住む8～9割の人が倭漢氏の一族だということです。飛鳥時代から奈良時代に掛けての漢人勢力の大きさを窺い知ることが出来、まさに「大和は漢人の国」だったのです。

高市郡は今来郡とも言われましたが、今来とは古くからの渡来人に対して新しく渡来してきた人を指しています。大和には弥生時代から多くの渡来人が住んでいたと思われませんが、それに対して新しくやってきた倭漢氏などが今来と呼ばれたのでしょうか。多くの渡来人がこの高市郡に定住した様を示しています。渡来はその後続くので、その時々に来来と呼ばれる人たちが生まれるわけで

すから、今来というだけではいつの時代の渡来人かを特定することは出来ません。

● 蘇我氏

蘇我氏は武内宿禰を祖としていますが、稲目以前についてはよく分かっていません。稲目は葛城氏の女を娶って、それにより政界に躍り出たのではないかとされます。稲目の子には欽明と結ばれた堅塩姫と小姉君、そして馬子という歴史上の有名人物がいるのですから、稲目自身の出自が優れていたのか葛城氏の力に頼ったのか、いずれかだろうと推測できます。

推測の一つとして百済からの渡來說があります。応神天皇の時代に渡来した百済の高官木満致と、履中天皇が磐余稚桜宮に都を造ったときの高官の一人蘇我満智宿禰が同一人物だということです。木満致は直支王が亡くなってその子の久爾辛王が立ったとき、王の年が若かったので国政を執り、王の母と通じて無礼が多かったので、これを聞いた応神天皇がわが国に召したと、日本書紀に書かれています。木満致は、百済の将木羅斤資が新羅を討ったときに新羅の女を娶って生ませた子ですから、百済系でもあり新羅系でもあるということになります。蘇我氏の行動を見てみると百済系か新羅系か不明という面がありますが、木満致が蘇我満智宿禰なら頷けるということになります。そしてまた、倭漢直氏が蘇我にべったりであったことも合点がいくのです。木満致が応神天皇時代の人であり、蘇我満智が履中天皇の時代ということになりますと、同一人物説が疑わしくなるのですが、日本書紀には時代を取り違えた記述が多くありますので断定することは出来ません。

出雲大社の一角に蘇我社という社があり、蘇我氏との関係がありそうです。出雲大社は大国主命を祀りますが、大国主は素戔鳴尊の子とも7世の孫とも言われます。素戔鳴は多分新羅を通して出雲にやってきた伽耶の人ではないかと思われまから、蘇我氏は素戔鳴や大国主に関係のある伽耶の出身と想像することも出来ます。この面からも蘇我氏渡來說が考えられるわけです。

④ 王仁

阿直岐の文化教養の高さに驚いた応神が、あなた以上にすぐれた学者がいるか、と尋ねると阿直岐は「王仁という人がいます」と答えました。最高の帝王学を皇子に学ばせたいと願っていた応神は荒田別・巫別を百済に遣わして王仁を召されました。王仁は論語十巻と千字文とを携えて渡来し太子菟道稚郎子の師となりました。太子は諸々の典籍を王仁から習いましたが、すべて理解したと言われます。太子は非常な秀才であって儒教の典籍を完全に読みこなしたのです。ところで千字文は王仁が渡来した頃にはまだ編集されておらず、王仁の渡来そのものを疑問視する説もあります。千字文だったかどうかは別にして、王仁が漢字に関する何らかの文書をもたらしたのは事実ではないでしょうか。

王仁系の氏族が本拠としたのは河内の古市でした。ここからは西文（カワチノフミ）をはじめ武生、栗栖、桜野、高志、藏などの諸氏族が出ています。高志氏からは大僧正行基が出ています。西文氏は倭漢氏（東漢氏）と拮抗するように河内での渡来人の一大勢力となりました。

また、古今和歌集の「なにはづに さくやこのはな ふゆごもり いまははるべと さくやこのはな」という歌は、王仁の作と伝えられています。紀貫之はこの難波津の歌をもって和歌の父と紹介しており、宮中の新年の歌会始のときには必ず詠み上げることに



王仁・『前賢故実』より

なっているそうです。百済から来た王仁が和歌をよめるのかという疑問が当然起こるのですが、この時代に文字を専有していたのは百済からの渡来人たちであったと思われますから、王仁が和歌の父であってもよいのかも知れません。

王仁の墓と伝えられる石が枚方市藤阪にあります。真偽のほどは不明です。枚方は宇治と古市を結ぶ道筋に当たりますから王仁が通行したことはあったでしょう。従って墓があったとしても不思議はないのですが確証はありません。伝承にも疑問が残ります。

藤阪にオニ墓と呼ばれる2個の自然石がありました。王仁の子孫と自称した禁野和田寺の道俊が1616年（元和2年）に「王仁墳廟来朝記」を著して、このオニ墓は王仁墓の訛ったものであると主張しました。1731年將軍綱吉の頃、京都の儒学者並河誠所が「五畿内志」という名所案内のような本を書いて、その中でこの説を追認しました。そして領主久貝因幡守正順に墓碑建設を進言し、「博士王仁の墓」の碑が建てられました。1937年になって菅原村の村長が大阪府に史跡指定を申請し、翌1938年（昭和13年）に大阪府は「伝王仁塚」として史跡13号に指定しました。太平洋戦争直前の空気が反映されたものだったように思われます。

王仁の存在は韓国では全く知られていませんでした。あちらの文献には見当たらないのです。まして王仁塚の存在は全く知られていませんでした。ところが今、全羅南道靈岩郡に「王仁廟」が建設されていて王仁の顕彰が行われています。その経緯については、金英達氏の「偽史朝鮮/王仁の墓地と生誕地」（むくげ通信181号所収）に次のように述べられています。



1968年に韓国の農業運動家の金昌洙が日本の農協視察のため訪日し、各地の農村を回るうちに、王仁の遺跡や王仁の後裔と称する人たちを知って電撃的な啓示を受けました。1970年（大阪万博の年）に再度訪日して王仁関連の資料を収集し、帰国後王仁研究所を設立します。こうして王仁研究の火を付け、王仁の出生地を探し当てるために「中央日報」紙上に「百済の賢人博士王仁の偉業—日本に植え付けた韓国魂—」を1972年8月から10月までに15回に亘って連載しました。そしてその新聞記事を見た全羅南道靈岩郡の姜信遠から「靈岩郡一円に王仁博士の遺跡と伝説が多い」との手紙を受け取ります。金昌洙は直ちに現地調査をして靈岩郡鳩林面聖基洞がまさしく王仁の誕生地であるとの心証を固め、1973年には著名な歴史学者を帯同して現地を踏査して、「王仁の誕生地は靈岩に違いない」との意見の一致を見ました。1975年、全羅南道知事が博士王仁誕生地聖域化事業計画を発表し、翌1976年にはこの地を「王仁博士誕生地遺跡」として地方記念物に指定、「王仁廟」を建設しました。以後、靈岩を「王仁博士の故郷」として売り出し、周辺を遺跡公園として観光地化し、王仁廟春季大祭や王仁文化祝祭を行事化していきます。

こうして王仁生誕地は枚方の王仁塚をはるかに上回る大々的な歴史の捏造が行われているとしており、これは日本の文化を開明した人物がまさに韓国人であったとの民族主義的思考が先行しているもので、北朝鮮における「檀君」の遺骨のでっち上げと同じ思想だと述べ、今や王仁廟がでっち上げだと言おうものなら袋叩きに遭いかねない雰囲気であると金英達氏は述べています。

枚方市は王仁塚を歴史的遺物とは認めていませんが、王仁がもたらした千字文に因んで漢字に関するイベントを実施するなど、王仁塚顕彰に力を貸した面がないとは言えません。靈岩郡とは交流を持っていますし、韓国からの観光客が伝王仁塚を訪れるようになりました。歴史的な価値は疑問視されていても観光面では大いに寄与しているようです。しかし韓国魂の発露に利用されているとすればちょっと首をかしげたくくなります。

● 菟道稚郎子

王仁が渡来してくる原因となった太子菟道稚郎子のお話しをしておきましょう。

“応神には皇位継承の有力候補が3人あった。一番上の大山守命、次の大鷦鷯命（後の仁徳）、そして菟道稚郎子である。応神は菟道稚郎子を後継者にしたいという思いがあり、大山守と大鷦鷯を呼んで、子供たちのうち年長の者と年下の者ではどちらが可愛いか、と訊ねた。年長者だと応える大山守に対して大鷦鷯は、これは菟道を後継者にしたいという謎だと悟って、「年少の者こそ可愛い」と答え応神を喜ばせる。そして菟道稚郎子が王位を継ぐことになった。”と日本書紀に書かれています。応神としては、国際関係が大事になってきた時代にふさわしいのは菟道であるとの思いが強かったでしょう。

菟道稚郎子の母は宮主宅媛（ミヤヌシヤカヒメ）といい父は丸邇之日触使主（ワニノヒフレノオミ）です。使主というのは阿知使主と同じように渡来集団の長であることを示しています。菟道稚郎子はこの母のもとで王仁の学問を受け入れる素地を養われていたと思われます。また王仁が倭の言葉で講義を行うわけがなく恐らく百済語だったでしょう。それを完全に理解したというのですから、どう考えても百済語を知っていたということになります。応神は、その素養こそがこれからの帝王の必須条件と考えたのではないのでしょうか。更に突っ込んだお話しとして、わが国に人質として来ていた直支が百済の王となり、その妹新齊都媛を応神に仕えさせたという記述が日本書紀の中にあります。直支王がその王位に就くに当たって倭の力を必要としたとすれば、その妹を応神のもとに送ったということは十分考えられることです。その新齊都媛がもし宅媛と同一人物であったとしたら、宅媛はかなりの教養人であったということになります。（上外垣憲一氏「倭人と韓人」による）そして応神が二人の兄を差し置いて菟道稚郎子を太子に立てた意味が理解できることになります。そしてまた、菟道稚郎子が百済と極めて近い関係にあったということになるわけです。

兄を差し置いて王位に就くことを嫌った菟道稚郎子が、自殺してまで王位を大鷦鷯に譲ったことが美談として伝えられます。しかしこれについてはいろいろな矛盾があるところから、菟道稚郎子が一旦王位に就いたが大鷦鷯によって死に追いやられ、大鷦鷯が即位して仁徳帝となったという見方が有力なようです。即ち記紀に記されている仁徳の事跡は二人によって行われたものとするのです。仁徳帝前半の善政と後半の奔放な行状とは同一人物のものとは考えにくく、前半は菟道稚郎子のもの、後半が大鷦鷯のものというわけです。殺されたのか自殺したのか興味ある問題ですが、いずれにしても菟道稚郎子のお墓が京阪宇治駅のそばにあります。

● 辰孫王

ところで、菟道稚郎子の師となったのは王仁だったのでしょうか。続日本紀の延暦9年条に菅野真道の系統に関して次のような記述があります。真道は津氏一族で辰孫王の子孫と言われます。

「・・・応神天皇は、上毛野氏の遠い先祖である荒田別に命じ百済国に使いさせ、有識者を招請させました。国主の貴須王はうやうやしく使者の申し出を受け入れて、一族の中から人材を選び、孫の辰孫王を派遣して、使者と共に入朝させました。天皇はこれを喜ばれ、特にいつくしみ深い命令を下して、皇太子の師とされました。こうして初めて中国の典籍を日本に伝え、大いに儒教の学風をあきらかにされました・・・」

ここにある貴須王は13代近肖古王の次の14代近仇首王（375～384）ですから、応神の時代のことに相違ありません。皇太子とはやはり菟道稚郎子のことでしょう。王仁を招請するために百済に派遣されたのも荒田別です。また金達寿氏によりますと、「ワニ（王仁）とは朝鮮語のワニンム（王任）ということで、これは「王様」ということにほかならない」ということだそうです。こうして見ると、辰孫王と王仁とは同一人物であると考えて間違いのない気がします。

辰孫王の4代目の子孫が3つに別れて葛井氏、船氏、津氏となりました。河内の藤井寺はこの葛井氏の氏寺があったところであり、葛井氏はこの辺りを根拠としていたことが分かります。王仁の

子孫は前述のように古市を根拠として武生氏、栗栖氏、桜野氏、高志氏、藏氏などとなりました。古市と藤井寺とは至近距離ですから同じ場所とも言えますが、伝えられる子孫の氏族は全く異なります。このことから同一人物説にやや疑問が残るのですが、同一説の優位はゆるがないように思います。そうすると前述の王仁墓はいよいよ怪しくなってきます。

● もう一つの百済

さて、王仁を招請した応神天皇は百済の人だったという説を金容雲氏が唱えています。応神は百済の熊津（ウンジン）から来た人で、熊津は応津とも書かれていて応神という名はその来歴を表しているということです。

百済は高句麗の始祖朱蒙の子である温祚が漢江の流域に建国したものです。温祚の兄沸流は温祚と共にやってきて仁川の近くに国をつくりますが失敗し、恥じて自殺したとされています。しかし、広開土王碑には百残と利残という二つの国名が書かれていて、百済に二つの国があったことを窺わせています。実は沸流は仁川から南下して熊津に建国していてこれが利残であるとするものです。残とう字は高句麗が百済を軽蔑して済の代わりに使いました。熊津は久麻那利（クマナリ）で、それが利済とも言われたのでしょう。百済は漢城百済と熊津百済との二つがあったのです。そうすると高句麗によって蓋鹵王が殺害されたときに漢城百済は滅亡し、熊津百済一国が存続したことになります。百済は漢城から熊津に遷都したというのではなかったのです。因みに、蓋鹵王は加須利君とも呼ばれましたから彼自身が利済の人だったかも知れません。

神功皇后は新羅遠征のとき孕んでいた子が生まれまいようにと石を抱いて行き、帰国後に応神が生まれたということになっています。これは応神のルーツをわが国とするための作為であって、実は神功が半島から応神を連れ帰って来たことを表しているのではないのか。とすると熊津は応津であることと考え合わせて、応神は熊津百済の人であるということになります。

このように推測しますと、応神は百済語を話していたのであり王仁とは通訳なしで話すことが出来たでしょう。そして、百済または伽耶と関係の深い宮主宅媛を寵愛し、その子菟道稚郎子を可愛がったことがすんなりと理解出来るわけです。果たして真実はどうなのでしょう。

（2）渡来第2期

① 5世紀末～6世紀初の流れ

百済の近肖古王は4世紀において大規模な進展を遂げて王権を確立しました。更に百済は楽浪郡の中国系の人たちが開拓した海路を通して活発な貿易活動を行い、倭とも密接な関係を結びました。このとき多くの人々が百済から列島に渡り、いろいろな面で活躍することになります。百済にとっては安定的な発展期であったわけで、この時期の渡来は亡命ではなく積極的な交流でした。中国南朝に対しても頻繁に交流し、東アジアにおいて百済の名声は急速に高まりました。

しかし高句麗の広開土王に続いて長寿王が南下政策を始めると、百済は大きな危機を迎えることになります。そして同じように高句麗の圧迫を受けていた新羅と同盟して高句麗の攻撃に対抗しました。475年に長寿王が侵攻してくると蓋鹵王は王子を送って新羅の援軍を求めますが、新羅の2万の軍勢が到着する前に百済軍は大敗して慰礼城や漢城は陥落し、蓋鹵王は殺害されてしまいます。蓋鹵王の子文周王は逃れて錦江流域の熊津に都を移し、新羅と結んで高句麗に立ち向かいしました。こうして高句麗の侵攻をようやく食い止めたものの、漢江流域や伽耶地域の勢力圏を喪失して百済の版図は大きく後退してしまいます。その後、484年に高句麗が新羅の北方に侵入したときには、百済は新羅に援軍を送り母山城の戦いで高句麗を撃ち破っています。

ところで日本書紀の雄略5年条に蓋鹵王の弟昆支王が倭に遣わされる記事があります。雄略5年というのは461年に当たります。百済が高句麗に対抗して新羅と結んだと同様に倭とも同盟を結んだものと考えられます。「7月に昆支は京に入った。すでに5人の子があった。——「百済新撰」

によると、辛丑年に蓋鹵王が弟の昆支君を遣わし、大倭に参向させ、天王にお仕えさせた。そして兄王の好みを修めた。とある。」と記されています。5人の子があったというのですからお伴の人数も多かったでしょう。その人たちが河内の飛鳥に定住することになりました。

熊津に都を定めた百済で、文周王が暗殺され三斤王が急死するということが起こり、雄略はわが国にいた昆支王の5人の子の第2子である末多王を本国に送り帰り王位に付けます。これが東城王です。東城王は高句麗への対抗のために新羅との同盟強化を図り、493年には通婚を要請して新羅の高官の娘が嫁いできました。翌494年には高句麗が新羅を攻めますが、東城王は援軍を送って高句麗を退けます。また495年に高句麗が百済に侵入したときには新羅が百済を救援しました。498年には東城王は耽羅を服属させています。こうした三国関係の中で民衆の生活は不安定になり、戦乱遭遇した半島南部の人たちが大勢列島に渡ってきたことは容易に想像できるのです。

② 昆支王

昆支王の渡来について日本書紀に次のような記述があります。“雄略5年4月、百済の加須利君（蓋鹵王）が、池津媛が焼き殺されたことを人伝てに聞き、議って、「昔、女を貢って采女とした。しかるに礼に背きわが国の名をおとしめた。今後女を貢ってはならぬ」と言った。弟の軍君（昆支王）に告げて、「お前は日本に行つて天皇に仕えよ」と。軍君は答えて、「君の命に背くことはできません。願わくば君の婦を賜つて、それから私を遣わして下さい」と言った。加須利君は孕んだ女を軍君に与え、「わが孕める婦は臨月になっている。もし途中で出産したら、どうか母子同じ船に乗せて、どこからでも速やかに国に送るように」と言った。共に朝に遣わされた。”

このようにして昆支王が倭国にやってくるのですが、5人の子と一緒にであったことは前述の通りで、その第2子が東城王として立ちます。他の残された子の子孫が河内の飛鳥（安宿）に定住し、そして飛鳥戸氏としてその名を残すことになります。

● 武寧王

日本書紀は前の記述に続いて“6月1日、身ごもった女は果たして筑紫の加羅島で出産した。そこでこの子を嶋君という。軍君は一つの船に母子を乗せて国に送った。これが武寧王である。百済人はこの島を首島（ニリムセマ）という。”とあります。熊津で東城王の後に立ったのがこの武寧王でした。

東城王は晩年には暗君となって贅沢に耽り、499年の大干魃で民衆が疲弊しているのも顧みず、側近と共に宴会に明け暮れたと言います。そうした状況の中で501年に衛士佐平の加の放った刺客によって殺害されます。その後に立てられたのが武寧王でした。加は直ちに鎮圧されました。武寧王は512年に高句麗に大きな打撃を与えるなどして強国となり、南は馬韓や伽耶地域に勢力

を伸張して百済の国際的地位を高揚させました。継体王朝の相伴金村と交渉して伽耶地域4郡2県の權益を倭国から取り上げています。継体については別項を設けて述べたいと思います。

公州市（熊津）の宋山里古墳群の一つから墓誌が発見されて、武寧王の墳墓が特定されました。墓誌には寧東大將軍百済斯麻王は年62歳で523年5月7日に亡くなったことが記されていました。墳墓は王妃を合葬した煉瓦造りで、その煉瓦に刻まれた文様はわが国で多く見られるものでした。また柩

は日本にしかない高野槨で作られていました。このことから武寧王は加羅島から直ちに送り返されたのではなく、かなりの期間倭国に滞在して親しく交わったのではないかと推定もなされています。



● 飛鳥戸氏

奈良時代の正五位上の官人で氏姓を安宿公、百済安宿公、飛鳥戸造、安宿戸造などといい、名を奈止麻呂、奈登麻呂という人がおります。飛鳥戸氏は河内国安宿郡を本拠とし、百済24代王の東城王の末裔であると称します。東城王の末裔ということは即ち昆支王の末裔ということになるわけです。羽曳野市に飛鳥戸神社というのがあって、その祭神は百済昆岐王となっています。明らかに飛鳥戸氏が昆支王に繋がっていることを表しているのです。



奈止麻呂自身についてはあまりよく知られていませんが、その娘に永継というのがいて、これが藤原北家の内麻呂に嫁いで真夏、冬嗣を生み、その後桓武天皇の後宮に入って正三位大納言良岑安世を生んでいます。即ち平安時代初期の有名人3人の母親になっているのです。このことが後に百済王家の没落の大きな原因にもなっているのですから、同じ百済王家末裔同士の不思議な因縁ということになります。これについては第6部でお話しする機会があります。

(3) 渡来 of 第3期

① 6世紀中葉～7世紀中葉の流れ

百済で武寧王のあとを継いだのは聖王でした。聖王は中国南朝と結び、新羅や倭と連携を強化して高句麗と対抗する百済の姿勢を貫きました。しかし高句麗の圧迫は強く538年には首都を熊津から泗に移し、国号を「南扶余」と改めます。泗比は現在の扶余ですが熊津から錦江を下ったところにあり、中国南朝や倭と交流するためには利便の良い場所です。高句麗に対する防衛上においても熊津よりは優れていました。新羅に対しては伽耶地域をめぐる政情が不安定になりつつあり、馬韓を固めるためにも熊津より有効な場所でした。

聖王は連携強化を図るために倭に対して仏教を伝えます。百済は楽浪郡や南朝を通じて中国の文化を積極的に取り入れ国際社会に進出していましたが、倭も同じく中国の文化の吸収には積極的でした。倭には応神時代に王仁が論語と千字文を伝えたとされますが、実際には継体時代に五経博士が来日したのが、中国文化特に儒教伝来の最初ではないでしょうか。そして538年(548年とも552年とも言われる)聖王は欽明朝に釈迦仏の金堂像と教典数巻をもたらし、上表して仏教礼拝の功德を述べ伝えています。欽明帝は仏教を受け入れるかどうかを一人では決めかねて群臣らにその是非を尋ねました。蘇我稲目は西の国々はみな礼拝しているとして受入を是としますが、物部尾輿や中臣鎌子らは国つ神の怒りを受けることになるとして反対しました。そこで欽明は蘇我稲目に試みに礼拝させることにしました。このように大陸文化の摂取に積極的であった蘇我氏が次第に他の豪族を抑えて台頭していきます。

541年には、新羅に滅ぼされた金官加羅国(任那)の復興をめぐる百済が倭の介入を要請した所謂任那復興会議が開かれます。百済の意図するところは百済主導の伽耶連合体制の承認と新羅に対する援軍の派遣でしたが、倭から武具や援軍の派遣されてきたのは547年以後のことになりました。この頃、百済と新羅は高句麗に対しては同盟して当たるようになっており、551年には連合して高句麗を攻め、かつて百済の領土となっていた漢江流域を奪還しました。しかし北方への進出を企てていた新羅は、553年に百済軍を急襲して漢江流域を占領してしまいます。これに激怒した聖王が、自ら新羅へ進出しようとして管山城で新羅軍と戦いました。しかし百済軍は大敗を喫して兵3万が殲滅させられ聖王も戦死してしまいます。

日本書紀には、欽明16年(555年)に次の王威徳王が弟景王を送ってきて聖王の死を伝えたこと、威徳王が欽明18年(557年)に即位したことを記しています。これによれば王位は4年間空白であったこととなります。聖王は貴族(高官)らの意見を無視して管山城に進出したと伝え

られていますし、威徳王も従軍し倭軍によって危機を救われたと言いますから、次期王位に関して貴族間に対立があったことが想像されます。この間、勢いに乗った新羅は伽耶地域の広範囲に進出して562年には高霊伽耶を滅ぼしました。高霊伽耶は大伽耶とも言われて伽耶諸国の盟主的な存在でしたから、これによって伽耶は新羅の支配下に入ることになりました。

この高霊伽耶の滅亡はわが国では任那の滅亡として伝えられます。もともと任那とは532年に新羅によって滅ぼされた金官伽羅を指していました。任那日本府という表現が日本書紀に出てきますが、当時日本という言い方はまだ無かったと思われるから、欽明23年条に「新羅は任那の官家（ミヤケ）を討ち滅ぼした」とあるように、倭大王の権益を管理する役所が置かれていたと見てよいと思います。この日本府は加羅（高霊伽耶）と安羅に置かれていたようです。同じく欽明23年条に「総括して任那というが、分けると、加羅、安羅、斯二、多羅、率麻、古嗟、子他、散半下、



益山：王宮里五重石塔
（武王の王宮跡）

乞、稔礼、会わせて10国である。」と記されています。即ちわが国においても562年の高霊伽耶の滅亡はこの10国に及ぶ伽耶地域全土が新羅の支配下に入ったものと考えられるのです。

威徳王の時世は45年間に及び598年に74歳で亡くなりましたから、その弟景王が即位したのは70歳になってからでした。景王は1年で亡くなり、威徳王の子法王も1年で亡くなります。そして600年に武王が後を継ぎます。武王は威徳王の子という説と法王の子という説があります。このように聖王から武王への王位継承はややこしいのですが、これも高句麗と新羅の間にあって百済の王位が

高官の思惑によって揺らいでいたことの証拠ではないでしょうか。

武王については、益山への遷都という問題があります。益山は泗比の南約30キロメートルのところにありますが、北に山脈を負い南は馬韓地方に向けて開けていて、南を支配するためには泗比よりも立地としてはよさそうです。一説によりますと、益山は法王がかねてより開拓しており、そこで生まれ育った武王が地元の豪族と共に王宮を立てたのではないかと思います。一理あるかも知れませんが、いずれにしても武王は一時益山に遷都しますが恐らく多くの高官の反対や対立があつて武王の子義慈王は泗比に戻っています。

これは法王が泗比を離れて益山に暮らしているとき土地の豪族の娘と結ばれ、武王が生まれたのではないかの憶測を生んでいます。武王の子の義慈王が641年に王位に就くと貴族中心の政治体制の改革を行い、642年には王族と高官ら40人を放逐しました。日本書紀には皇極元年に百済の使いが「今年1月、国王の母が亡くなりました。また弟王子に当たる子の翹岐（ギョウキ）や同母妹の女子4人、内佐平岐味、それに高名の人々40人あまりが島流しになりました」と言ったと記されています。これも泗比と益山の貴族豪族の対立から生まれた問題ではなかったかと想像されます。

（薯童謡）

武王については「薯童謡（ソドンヨ）」という説話があります。韓国ドラマでもお馴染みです。“威徳王の宮殿の舞姫であった寡婦が一人の男の子と貧しく暮らしていた。男の子は薯を掘りそれを売って生計を立てていたので薯童と呼ばれた。新羅の真平王の3番目の善花姫がたいへんな美人であるという噂を聞き、新羅の都に行き童謡を作っては子供たちに歌わせた。その童謡の内容が宮廷にまで知れ渡り、王は姫を流刑にしよう。姫に王妃は純金1升を路銀として持たせた。流刑の途上薯童に出会い同行することとなる。そして薯童の名を知り童謡の内容も知ることになった。



二人は百済で暮らしたが生活は苦しかった。ある日、姫は母から貰った純金を出して生計を立てようとする、薯童はその純金を見るや否や大笑いし、自分が薯を掘る山にはそれが土の塊のように積んであると言ってそれを見せた。善花姫は驚いてその黄金を知命法師を通して新羅の宮殿に送った。真平王はその神秘的な姫の変貌を疑い、常に安否を問うようになった。そして薯童は人心を得て王位に上がる。それが武王である。”

武王が真平王の姫と結婚したというのは説話上の話でしかありません。しかし新羅や高句麗との関係の中で新羅との婚姻を望んだかも知れないということは考えられます。武王の子義慈王はその母が没するとす

ぐに弟翹岐や妹をはじめ関係者を追放しています。母がもし新羅王の娘であったとすると、その母が亡くなったのを機会に新羅の血を受け継ぐ者を追放したということが考えられます。自らも新羅の血を受け継いだわけですが、百済の貴族高官らの意向もあって王としてやむを得ない決断だったのかも知れません。

そうした状況の中で義慈王は、新羅に支配されていた伽耶の地を奪回するため642年に新羅西部に進軍し、伽耶地域の城40余りを降伏させました。この行動を倭に承認させるため義慈王は王子豊璋と善光を人質として派遣しました。643年には新羅と対立していた高句麗と手を結び、新羅を討とうとしましたが、新羅が中国の唐に救援をもとめたため攻撃を中止します。この時唐は百済と新羅に対して和平を求めましたが、その後も644年から649年にかけて両国の間には激しい戦闘が繰り返されました。そして徐々に新羅軍が優勢となり、649年には道薩城付近の戦いで百済は大敗してしまいました。しかし義慈王はその後新羅への抗戦を続け、655年には高句麗と組んで新羅の30城を奪っています。

半島を支配したい唐の高宗は、高句麗との戦争で敗北を重ねて業を煮やしていましたが、新羅の救援要請を受けて新羅と結んで高句麗を討つことを思い立ち、先ずはその要請を受け入れて百済攻略を決意しました。660年高宗は蘇定方に命じて大軍13万を率いて黄海を進ませ、新羅の武烈王・金庚信の5万の軍と連合して百済を攻撃することになりました。唐・新羅の連合軍が首都泗比に迫ると、義慈王は太子隆と共に城を離れて北方に逃れました。第2子の泰が王を名乗って城を死守しようとしたのですが、太子隆が唐に投降したのを知って泰も城を開いて投降し、逃げのびていた義慈王も降伏してここに百済は滅亡してしまいました。義慈王は太子隆らと共に唐の都長安に連れて行かれ、そこで礼遇を受けましたが間もなく病死しました。

その後百済の復興運動が起こり倭も援軍を派遣しますが、663年に唐・新羅連合軍によって鎮圧されてしまいます。百済が滅亡した後、668年には唐・新羅連合軍によって高句麗も滅ぼされます。続いて今度は新羅と唐の間で戦争が起こり、673年に新羅は唐を半島から駆逐して統一新羅が実現します。

② 百済王豊璋と善光

日本書紀の舒明3年条に「3月1日、百済王義慈は王子豊璋を人質として送ってきた。」とあります。善光のことが書かれていませんから、この時に一緒に来たかどうかは分かりません。そのため百済が滅んだときに亡命してきたのではないかとの説もあります。日本書紀の天智2年条には、百済復興軍の拠点である州柔城が唐に降伏した後、日本の水軍と共に船を出して日本に向かった人々について「佐平余自信、達率木素貴子、谷那晋首、憶礼福留と、一般人民」としていて、王子善光の名はありません。王子がいたのなら当然名がある筈ですから、善光がこのときの亡命者とは考えにくいと思います。いずれにしても善光が渡来してきていたことは疑いのない事実です。

660年に百済が滅ぶと、王族の佐平鬼室福信らが州柔城を拠点として復興運動に立ち上がります。百済が滅亡したといっても、正確に言うならば泗 江を都とした余王朝が滅ぼされたということであって、王族や貴族豪族の力は残っているのですから、復興運動というよりも百済の国内で進行する唐・新羅への抵抗運動と言った方がよいのかも知れません。そして百済の残余勢力もこれに呼応して戦い続け、新羅を撃ち破ったりしました。

福信は倭に援軍を乞い、王子豊璋を国王として迎えたいと申し出ます。斉明女帝はこれを聞き入れて661年に皇太子中大兄皇子らと共に自ら博多に進軍し朝倉宮に移りました。そして豊璋に大織冠を与え、狭井連檳榔・秦造田来津を遣わし軍兵5千余を率いさせて半島に送り返えしました。女帝は朝倉宮で病を得て崩御されることとなりますが、その後倭の大軍が百済に向かい唐との合戦を挑みます。その様子を日本書紀は次のように記しています。



錦江と落花岩

「(663年8月) 17日に敵将が州柔に来て城を囲んだ。大唐の將軍は軍船170艘を率いて、白村江に陣をしいた。27日に日本の先着の水軍と、大唐の水軍が合戦した。日本軍は負けて退いた。大唐軍は陣を堅めて守った。28日、日本の諸将と百済の王とは、そのときの戦況などをよく見極めないうで、共に語って「われらが先を争って攻めれば、敵はおのずから退くだろう」といった。さらに日本軍で隊伍の乱れた中軍の兵を率い、進んで大唐軍の堅陣の軍を攻めた。すると大唐軍は左右から船をはさんで攻撃した。たちまち日本軍は破れた。水中に落ちて溺死する者が多かった。

船のへさきをめぐらすこともできなかった。朴市田来津は天を仰いで決死を誓い、齒を食いしばって怒り、敵数十人を殺したがついに戦死した。このとき百済王豊璋は、数人と船に乗り高麗(高句麗)へ逃げた。」これが有名な白村江の戦いですが、日本の水軍は斉明女帝が博多に赴く途上で瀬戸内海沿岸から呼び集めたもので、数こそ多かったものの統率がとれておらず褒賞目当てに先を争って進みましたが、訓練された唐の水軍の前には全く齒が立たなかったでしょう。

この後9月7日、百済の州柔城は唐軍に降伏し、敗残の水軍と共に多くの貴人国人がわが国に亡命してくることになります。中大兄皇子は唐の来襲を怖れて対馬・壱岐・筑紫などに防人と烽火を置き、筑紫に水城を造り、亡命百済人に命じて長門や筑紫(大野・椽)などに山城を築かせました。百済の官人に位を授けるため百済の官位を研究し、後に鬼室自信らに大錦下を、鬼室集斯に小錦下その他多くの百済人に位を授けています。

また百済の民男女4百人あまりを近江国神崎郡に住ませ、更に百済の男女2千余人を東国に住ませ、百済の人々に対して僧俗を選ばず3年間、国費による食を賜りました。664年3月、中大兄皇子は豊璋の弟善光らを難波に住ませました。その理由をはっきりしませんが、百済からの亡命者の動きとの関係があったのではないのでしょうか。即ち百済人の受け入れ体制を確立するためではなかったかと想像できます。善光はその後持統天皇からわが国の氏姓としての「百済王(クダラノコニキシ)」の姓を与えられます。そして百済王敬福が枚方と関係を持つことになっていくのですが、それについては別にお話しします。

中大兄皇子は即位して天智となりますが、唐に対する警戒から都を近江に移し、河内の高安城、讃岐屋島城、対馬金田城を築きました。また余自信・鬼室集斯ら男女700余人を近江国蒲生郡に移住させたと書記は伝えていますが、続いて天智はこの蒲生郡日野を訪問し、宮を造営すべき地をご覧になったと記されています。百済人を移住させ新しい宮の造営を計画されたのではないのでしょうか。

3. 継体大王の時代

半島特に百済からわが国に人たちが渡来してくる流れを見てきましたが、5世紀末の第2の流れの時期は雄略や継体の時代に当たります。継体大王は樟葉宮で即位したという枚方にたいへん馴染み深い関係があり、また継体を大王に導いた河内馬飼首荒籠も枚方に縁が深いと考えますので、特に別項として取り上げて見たいと思います。

(1) 継体の登場

① 継体の出自

継体大王が枚方樟葉宮で即位したのは507年のことです。樟葉宮は何処かといいますと樟葉丘2丁目の小高い山にあって、そこに交野天神社があり石段脇に「此附近継体天皇樟葉宮跡」との碑が立っています。ここがそうだということになっています。

応神または仁徳から始まった河内王朝と言われる王朝は、武烈で途絶えてしまいました。王室内における権力闘争によって多くの男子が殺されて後継者がいなくなったと言われますが、いずれにしても武烈には子がなく、王室内に適当な後継者がいませんでした。有力貴族である大伴、物部、蘇我、許勢らが相談して、最後に白羽の矢を立てたのが越前(福井県)にいた男大迹王(オオドノオウ)でした。応神帝の5世の孫と言われて系図はありますが真偽のほどは分かりません。日本書記が書かれた頃には、皇族として認められるのは5世までと定められていたので、それを当て嵌めたのではないかと考えられています。父の彦主人王は近江国高島郡三尾の豪族であり、母の振姫は垂仁帝の7世の孫と言われ越前坂井三国の出身です。彦主人王が早くに亡くなったので、振姫は幼い男大迹を連れて越前高向に帰り、男大迹はそこで養育され成人しました。



② 河内馬飼首荒籠

白羽の矢を立てられた男大迹は越前では大へん人望の高い王で、九頭龍川の治水などに功績がありました。大連大伴金村が現地に赴いて招請しますが、男大迹王には既に大王の気品が備わっていたと言います。しかし思慮深い男大迹はなかなか承諾しません。中央政権に何の関わりもなかった自分が引き出されることに警戒心を持つのは当然のことです。事実、男大迹より前に声を掛けられた亀岡の大和王は、使者が来たと聞いただけで身の危険を感じて逃げ出しています。

そのとき仲を取り持ったのが河内馬飼首荒籠でした。荒籠は名前の通り河内の馬飼いの首領です。馬飼いは馬を使って荷を運んだ運搬業者であり、戦時には戦闘要員として活躍もします。河内馬飼の根拠地は四條畷辺りというのが定説になっていましたが、考古学の調査が進むにつれて交野即ち枚方の辺りも馬飼いが盛んであったと見られるようになりました。枚方の古墳からも馬具が出土しています。

荒籠は、日本海を挟んで半島と交易していた男大迹王と運搬業を通して旧知の仲だったのでしょう。荒籠という名は半島伽耶地域にあった安羅の人という意味ではないかと想像されます。安羅は任那日本府があったところで倭人たちも大勢渡っていました。任那日本府とは公的な機関というよりも、倭人たちが交易のために利用したサービス機関だったかもしれません。男大迹王が交易していたのもこの安羅が主だったでしょう。そして荒籠とは特別な関係にあったものと思います。荒籠の説得によって男大迹王は大和の招きに応じることを決心しました。それでもまだ不安が残ります。そこで荒籠の勢力範囲である樟葉で即位したのではないのでしょうか。樟葉は巨椋池から琵琶湖を通

って越前へと繋がるルートと、淀川を下って瀬戸内海から豊浦（下関）や筑紫を通して半島へと渡っていくルートの結節地点であり、また木津川から奈良山を越えて大和へと通じます。いわば三つの方向を睨んだ要衝の地と言える場所でもあったのです。

（２）継体の遷都

① 樟葉宮から都築宮へ

507年に樟葉で即位した男大迹王（継体大王）は、武烈帝の妹の手白香媛を娶って皇統を引き継ぎます。それは大和の豪族たちの希望でもあったでしょう。即位して4年目の511年に筒城宮に都を移します。樟葉からは山一つを越えたところで、現在の精華町の辺りです。一步大和に近づいたわけですが、地形的に見ればやはり一つの戦略的要衝と言えます。

都築宮から生駒山の麓にある平群へは西に一直線で、そこは平群氏の根拠地です。奈良山を南に越えれば大和の地です。東には巨椋池を通過して山科から琵琶湖へ、そして越前へと繋がるルートがあります。このルートへは樟葉よりも一段と便利な地です。後方を固めて大和を睨む絶好の場所といえます。またこの地は仁徳帝の妃磐之媛が移り住んだところですが、磐之媛の出自葛城氏の縁で半島の人たちが多く住み着いていました。この意味でも継体には安全な場所の一つだったのです。



② 都築宮から乙訓宮へ

7年後の518年には今度は乙訓宮に都を定めます。一転して大和から離れた地に移ったことになります。この時期は新羅が伽耶に進出し、恐らく九州の筑紫造磐井とも連携を図っていたでしょう。これより前の512年に百済の武寧王が任那4郡（上タリ、下タリ、娑陀、牟婁）の割譲を要求してきて大伴金村がこれを承認します。この地域は馬韓だったところで蟾津江の西側に当たり、百済の支配地域に近く倭からは遠いということから、これを承認したと日本書紀は伝えています。また513年には百済にコモンとタサの2県を譲っています。これに対して伽耶の伴跋国が反発してコモンの地を要求しますが、倭はこれを受け入れませんでした。勿論任那を倭が完全に支配していたわけではなく、郡や県を譲るとか割譲するとかという表現は当を得ていませんが、倭がこの地域に持っていた何らかの権益（例えば軍事権とか）を百済に譲ったものと思われます。継体や荒籠

が関係する安羅国も新羅と百済の間であって不安定な時期を迎えます。

このような半島情勢の中で、継体としては筒城宮よりも半島に対応し易い乙訓宮の方が重要であったのではないかと考えられます。木津川沿岸や淀川左岸は水流の関係で水深が浅く良港を作ることが難しいのですが、淀川右岸は港を作り易いのです。高槻の芥川が淀川に注ぐ川口にある津之江町は港の跡があるところであり、筑紫津神社という社があって筑紫との交流の痕跡を残しています。継体の墓は高槻の今城塚古墳とされており、この地域に継体を



支援する大きな勢力があったことを伺わせます。即ち、乙訓宮は九州や半島を睨み、在地の勢力を有効に利用することが出来た点で、継体が最大限に力を発揮出来る場所だったのです。最終的にどうしても大和入りをしなければならなかった継体にとって、対九州、対半島問題に多くの布石をしておくためには、極めて重要な都であったと言えるのではないかと考えます。

大和磐余玉穗宮に移ると同時に半島への近江臣毛野の派遣を実施し、筑紫国造磐井の反乱に対しても迅速な対応を見せた継体の指導力は、この乙訓宮の間に培われたものと言ってよいでしょう。百済はこの問題の代償として五経博士段楊爾を派遣してきます。王仁の渡来が中国の文化を最初にわが国に伝えたことになってはいますが、実はこの五経博士の来日のときが最初であるということも考えられます。継体がわが国の国際的地位の向上を目指して、任那の地と引き替えに中国文化の導入を図ったとすれば、後世に伝える意義はむしろ大きかったと言えるでしょう。

（３）近江臣毛野の半島出兵

① 近江臣毛野と枚方

「継体 21 年（527 年）6 月、近江の毛野臣が兵 6 万を率いて任那に行き、新羅に破られた南加羅・トクコトンを回復し、任那に合わせようとした。このとき筑紫国造磐井が、ひそかに反逆を企てたが、ぐずぐずして年を経、事のむつかしいのを怖れて、隙を窺っていた。新羅がこれを知ってこっそり磐井に賄賂を送り、毛野臣の軍を妨害するように勧めた。」と日本書記は伝えます。

これを知って継体は物部麁鹿火を大將軍として磐井を討たせました。528 年、麁鹿火は磐井を切り、反乱を完全に鎮圧します。これによって磐井と新羅の妨害を消滅させた継体は改めて近江毛野臣を安羅に派遣します。安羅は任那日本府のあったところですが、ここで毛野臣は南加羅の回復のために働きますが、毛野臣に人望が無かったうえにそのやり方が過酷であったために反感を持たれて、交渉は失敗に終わります。かえって加羅をかき乱すという結果をもたらした毛野臣を継体は召還しましたが、毛野臣は帰る途上の対馬で病気のために死亡します。葬送の船が淀川を遡って近江に向かいます。そのとき毛野臣の妻が歌ったというのが、枚方（ヒラカタ）という名が初めて出てくる歌です。

ひらかたゆ 笛吹き上る 近江のや 毛野の稚子い 笛吹き上る

② 河内馬飼首御狩

過酷なやり方で交渉を行い人望を失った毛野臣の行状を聞いた継体は、人を使わして召還しようとされましたが、毛野臣は河内馬飼首御狩を京に送り、「私はまだ勅命を果たさないのに、京に戻ったならば、期待して送り出されながら、空しく帰ることになり面目がありません。どうか任務を果たして参内し、謝罪するのをお待ち下さい」と言わせました。しかしその後も新羅と小競り合いを繰り返すなどして信頼は得られず、かえって加羅をかき乱す結果となり召還されることになったのでした。

ここに登場する馬飼首御狩は毛野臣の従者として派遣された人です。荒籠と同じように河内馬飼の首領で、普段は交通業務に携わりながら戦時には軍馬を率いて戦闘に参加するのです。この御狩は荒籠の一族ではなかったのでしょうか。継体との関わりの中で毛野臣に従軍したものと思われます。だからこそ毛野臣は御狩を送って継体に上奏したのです。毛野臣の亡骸がヒラカタから淀川を遡って近江に向かったというのは、御狩がヒラカタの人であって、ヒラカタで毛野臣の葬送の行事を行い、そしてまた淀川を上っていったものと想像されます。だから「ヒラカタゆ」なのです。「ゆ」とは古語で「～から」の意味です。写実的で力強い歌として有名な「田子の浦ゆ 打ち出でて見れば 真白にぞ 富士の高嶺に 雪ぞ降りける」というのがありますが、この「ゆ」と同じ語です。余談ながらこの「ゆ」の意味がわからなくなった後世には、この歌が「田子の浦に 漕ぎ出て見れば 白妙の 富士の高嶺に 雪はふりつつ」という観念的な歌に改悪されてしまいました。

枚方市禁野に御狩野神社というのがあります。枚方市民病院のすぐ下にあつて和田寺の隣です。道路拡張の関係で最近建て替えられ新しくなりました。この神社の由来書には、万治寛文年間（1650～1660）に、禁野の市辺右衛門の廷内に勧請した社を、その後（年代不詳）和田寺の上方の現在地に移したと言ひ、大鷦鷯命と百済王・進雄命（スサノオノミコト）を祀っています。大鷦鷯とは仁徳天皇のことですが、百済王・進雄命とは何者なのかよく分かりません。この地に住んだ百済王一族と各地で支配者として祀られるスサノオとが合体した神様なのでしょう。御狩野とい



御狩野神社

う名については説明がありません。但し、明治時代までは「御狩神社」と呼ばれたそうです。地元の人は狩野とは禁野と同じく天皇や貴族の狩場であつて、貴人の狩場だから敬意を表して御の字を付けたのだと説明しています。果たしてそうでしょうか。実はもともとここに馬飼首御狩を祀る社があつたのが、いつの頃からか市辺宅に取り込まれてしまっていたのではないのでしょうか。だから元は「御狩の神社」だったので。天の川が天野川に変わってしまったのと同じです。

以前この附近に白雉塚古墳というのがありました。

御狩の祀堂がこの古墳のそばに立っていたのではないのでしょうか。古墳は宅地造成で完全に破壊されて跡形も無くなっていますが、ここからは鉄製の馬具や武器類などおびただしい量の遺物が出土しています。この白雉塚古墳は「この附近に同じ時代のこれ程の古墳が存在しないことから、広く枚方・交野地域を治めた豪族の首長の墓と考えられる。」と枚方市教育委員会の説明書に書かれています。6世紀後期の古墳といひますから御狩の墓とすれば時代的に一致します。この地域を治めていたかどうかは別にして、日本書記に書かれた御狩の事跡からすれば、御狩の墓と考えても差し支えないのではないかと私は思います。私の姓が狩野ですのでちょっと考察してみました。

4. 文化の渡来

高句麗・百済・新羅はそれぞれ固有の文化を持ちながらも中国の影響を色濃く受けていました。中国の文化は半島を通して我が国に伝わったと言ってもよいでしょう。中でも百済は特に我が国に大きな影響を与えました。

（1）五教博士

中国の文字文化がわが国に伝わったのは、恐らく卑弥呼の時代からでしょう。紀元2世紀の頃からだと思われます。卑弥呼は楽浪郡を通じて中国と交渉を持ちますが、楽浪の文化を真っ先に受け入れたのでしょうか。「鬼道をよくした」というのは恐らく道教による巫術を身に付けており、中国語に対する素養もかなりあつたのではないかと思います。だから中国や半島との交渉は卑弥呼の独占的な役割で、他の男王たちは卑弥呼に頭が上がらなかったのでしょう。巫女としての才能も勿論ですが、語学に強い女性の能力を発揮したのではないかと思います。卑弥呼が亡くなると国が乱れました。と言うことは、楽浪郡との交渉がうまく行かなくなったということでしょう。武力だけでは治まりがつかないのです。そして卑弥呼と同じような交渉能力を持った壺与を立てることになります。

文化的発展が遅れていたわが国では、大陸からの文化を吸収することは為政者にとって必要不可欠な課題でした。応神帝も、百済の人であるという仮説を別にすれば、恐らく自らは読み書きが出来なかったでしょうから、皇太子の帝王教育は強い願望だったでしょう。幸い中国文化に教養のある宮内宅姫と結ばれたのですから、その子の菟道稚郎子は幼いときから読み書きの素養があつたの

です。2人の兄を差し置いてでも菟道稚郎子を跡継ぎにしたかったに違いありません。そして更に磨きを掛けるために王仁を招聘しました。王仁は論語10巻と千字文を持ってやってきました。

この話を日本の歴史学者は殆ど信用していませんが、菟道稚郎子が実在の人物とすればかなり現実性のある話だと思います。それはわが国の支配階級が大陸の知識を渴望していて、そのことを表している話と思えるからです。この話を、継体大王の五経博士招聘の事実を下敷きにしたつくり話であるとする説がありますが、つくり話にしては出来過ぎているのではないのでしょうか。

継体6年(512)、7年(513)に倭は、百済の要請に従って任那(伽耶)の西部に属する4郡・2県を割譲します。割譲と言ってもこの地が倭の領有地であったわけではなく、百済に対して主張できる何らかの権益を保有していたのでしょう。この権益を百済に渡したということだと思います。百済はこの権益譲渡の代償として五経博士を送ってきます。倭がその派遣を要求したのではないのでしょうか。

五経とは儒教の教典で、易経、詩経、書経、礼記、春秋からなっています。中国では漢の武帝のときから五経を教え文教を司る文官として五経博士を置いてきました。百済でもそれにならって五経博士の制度を置いています。中国の文化を取り入れるために必要な制度でした。倭もまた当時の国際社会で活躍するための手段として中国文化を取り入れざるを得ませんでした。早くから伽耶地域と交渉を持っていた継体は、その必要性に敏感だったでしょう。そして4郡・2県割譲の対価として五経博士の来日を強く要求したものと思われる。

継体7年に五経博士段楊爾が来日します。10年には漢高安茂を遣わして交替させています。欽明15年には固徳馬丁安から王柳貴へと交替させたことが日本書紀に記されています。この間の記述が抜けているようですが、ずっと引き続き交替しながら五経博士が来日していたものと思われる。このように五経博士が継続的にわが国に滞在して文教に関わったということは、倭の国際的な地位向上に大いに役立つものだったでしょう。

推古朝において聖徳太子が中国に対して対等の国書を送ることができた背景には、このように大陸文化の吸収についての積極的な希求と努力があったのです。

(2) 仏教公伝

中国の文化の特色は、中国古来の儒教と道教に加えて仏教を取り入れ、3つの教えを混合させたところにあるでしょう。仏教は先ず高句麗に入りますが、百済に攻められ死亡した故国原王の後を継いだ小獸林王が、372年に前秦から順道を、374年に魏から阿道を受け入れて仏教を普及しました。375年には仏教寺院を建立し、ここに朝鮮仏教が始まることになりました。

百済では仏教は384年に西域の僧侶摩羅難陀によって東晋から伝えられました。526年には謙益がインドから律宗関係の教典を持ち帰りこれを広めたため、百済の仏教は律宗を中心に発展したと言われています。

新羅では法興王が仏教を公認しました。新羅王は信仰によって国を発展させる責任を負わされていたので、王名を仏教的な名前にするなど仏教を積極的に導入しました。真興王時代に高句麗の僧侶恵亮を迎えて国家的な教団組織が出来ました。高句麗・百済においても同様なのですが、新羅の仏教は護国信仰の面が特に強く、有名な花郎の精神的支柱にもなりました。

日本書紀によりますと、わが国に仏教が渡来(公伝)したのは欽明13年(552年)10月のことになっています。「百済の聖明王(聖王)は西部姫氏達率怒利斯致契らを遣わして、釈迦仏の金銅像1軀・幡蓋若干・経論若干巻をたてまつった。」とあります。戦前戦中に皇紀という年号を使っていましたが、仏さんがイチ・ニ・イチ・ニとやって来たと覚えさせられました。1212年です。皇紀は西暦に660年をプラスしたものですから、552年に当たることになります。「上宮聖徳法王帝説」などによりますと、これが欽明戊午年となっていて538年のことになります。現在はこの538年説が有力です。しかし、上田正昭氏はこの両説に問題があると548年説を

唱えられました。それによりますと、両説とも仏教公伝は百済聖王の即位26年目のこととされていますが、聖王の即位年を513年（「三国遺事」百済王曆即位年）とするか、527年（「三国遺事」の治政年数にもとづく即位年）にするかによって違っているのです。ところが武寧王の墓から発見された墓誌によりその没年（523年）が特定されたことによって、聖王の即位が武寧王の没年と同じならば523年となるわけです。そこから26年目に仏教が伝えられたとすると548年となります。

いずれにしても欽明朝の出来事で、欽明はその受け入れの可否を一人では決められず群臣に諮問します。蘇我稲目は崇仏を主張し、物部尾輿と中臣鎌子は反対を唱えて蘇我氏の礼拝する仏像を難波の堀江に棄ててしまいます。しかし物部氏も中臣氏も何時までも反対していたわけではなく、それぞれの氏寺を建立しました。この背景には仏教を受容して間もなくの頃から、神仏習合という考え方があったことを上田正昭氏は指摘しています。神仏習合とは、例えば「八幡大菩薩」は菩薩という仏のかたちをした八幡神であるというように、日本の神祇信仰と仏教の信仰とが結合したものです。後に本地垂迹といわれる考えが出てきて、天照大神は大日如来の化身であるというような見方が生まれます。そのような神仏習合思想の萌芽が、仏教伝来の当時からあったというのです。このように仏教は、わが国古来の神々信仰と習合しながら、国家鎮守の宗教として貴族豪族の間に急速に広がっていきました。

上田正昭氏は仏教伝来について重要なのは、仏像や仏具のみでなく何よりも僧尼の渡来ではないかと言われて、次のように述べておられます。

『日本書紀』には、百済から渡来した人々のなかに道深ら7人の僧があり、欽明天皇15年（554）の2月に百済の僧曇慧ら9人と交替したことを記す。そしてそのおり東城子莫古と交替した東城子言が渡来した年が、欽明天皇8年（547）であることが確かめられるので、548年前後のころに百済僧らが渡来していた可能性は濃厚である。」

「仏像などの伝来も重要だが、あわせて僧尼の渡来を無視してよいはずはない。これまでの仏教史の多くが、三国仏教史として天竺・中国・日本を中心としてきたことに対する反省をうけて、朝鮮半島に関する仏教史のあらたな研究成果が積みあげられてきているが、僧侶ばかりでなく尼僧の存在も無視するわけにはいかない。このことは日本の仏教史についても同様である。たとえば司馬達等の娘で得度した善信尼、その弟子の漢人夜菩の娘の善藏尼、錦織壺の娘の恵善尼などの活躍がそれであり、その活躍ぶりは『日本書紀』のみならず、『元興寺縁起』などにもみえている。善信尼の出家の歳を『日本書紀』が11歳としているのも興味深い。（中略）善信尼らは百済へ渡って帰朝した留学の学問僧でもあった。」わが国は仏教を通して百済との文化交流を持ちました。天竺・中国・日本という流れの中に百済を入れることを忘れてはならないと思います。

更にもう一つわが国の文化向上のために仏教教典がもたらした意義の大きさを知る必要があるでしょう。教典は梵語を漢語に置き換えたものですが、鳩摩羅什や玄奘といった人たちの集団によってその作業は行われました。梵語の個々の単語を漢字で音写し、その単語の意味が分かるように中国語の文法に則して置き換えました。これと同じように漢文からわが国の言葉に置き換える作業が行われ、そして漢文の訓読が作られたのでした。この膨大な作業を通してわが国の言語は大きな発展を見せ、文化の向上に著しく寄与したことは間違いありません。わが国が武力を派遣する代償として文化の渡来を希求したことは、国際社会に進出するために必要不可欠のことだったのです。

（3）道教の影響

道教は漢民族の土着的伝統的な宗教と言われます。老荘の思想を根源とすると言いますが、むしろ不老長寿を求める世俗的な神仙思想が受け継がれる中で、仏教への対抗上から老子を教祖に祭り上げたというのが真相でしょう。或いは老荘の思想を持ち出して哲学的な裏付けをしようとしたとも言えるでしょう。この過程で仏教を取り入れて重層的な教義が出来上がっていきました。わが国に

も道教は古くから自然に導入されたと思われます。卑弥呼が鬼道をよくしたと言われる鬼道とは、道教の中にある巫術でしょう。また垂仁天皇のために不老長寿の果実（非時の香果トキジクノカクノミ）を求めて大陸に渡る田島守の説話がありますが、これは神仙思想が早い段階からわが国に伝わっていたことを表しているものでしょう。

また、『日本書紀』の推古天皇10年（602）条に、百済からの僧観勒が「遁甲方術書」をもたらしたことを記していますが、「方術書」とは、医薬・星占などの道教の方術を伝えるもので、百済を通して道教が渡来したことが分かります。百済において道教は既に仏教と習合しており、それが仏僧を通してわが国にもたらされたと考えられます。

天武天皇は諡を天淳中原瀛真人（アメノヌナカハラオキノマヒト）と言いますが、淳は海のことであり瀛は瀛州山であり、不老長寿の仙人が住むという東の海中にある三神山の一つです。また真人は道教の奥義を究めた神仙にもとづく名ですから、天武帝が強く道教の信仰や不老長寿の神仙思想を持っていたことの証拠でしょう。

以上、百済を中心にわが国と半島との関係を見てきました。わが国が百済から受けた影響の大きさが分かります。



百済の大香炉
仏教と道教の習合を伝える

・ 百済の庶民生活

